

NETWORK

博物館ってなんだ シリーズ③

“ながら・ついで”街のオアシス博物館

—京都府立京都文化博物館— 2

開館2ヶ月で26万人 今、一番もてている博物館

—滋賀県立琵琶湖博物館— 4

障害者が普通に暮らす街 — 亀川 6

地域データ散歩 人口定着の最近の動き 8

地域計画のための一知半解事典⑥

戦後50年の全国一区の雇用システムの結果 10

見・聞・食

遺伝子喚起による本物のトマト 12

近況

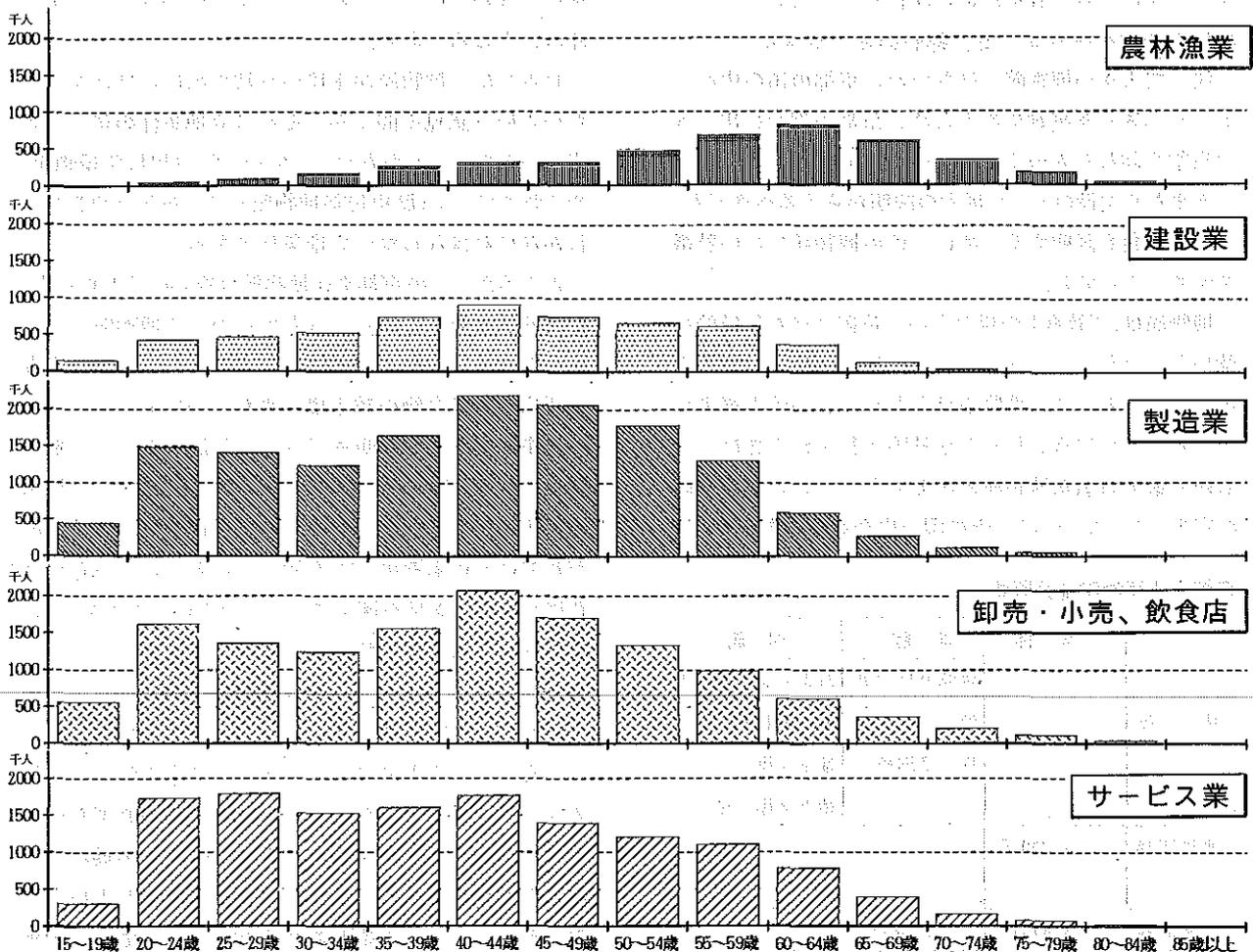
宇美町で初めての炭住改良住宅が完成

—原田地区・第2地区改良住宅— 14

所員近況 15

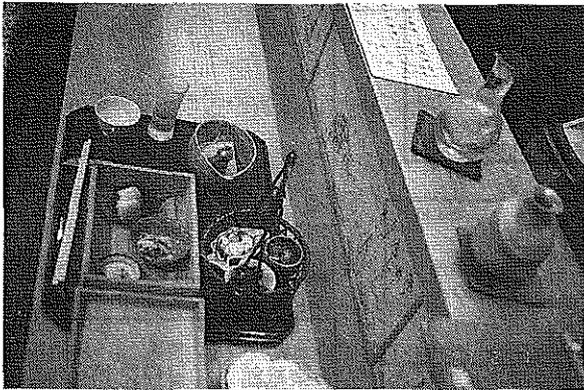
本・BOOKS

「システム自炊法」 丸元 淑生 著 18



●農業は高齢者が支え、若い人はサービス業へ、製造業も少し高齢化

平成2年国勢調査で我が国の年齢階層ごとに産業別就業人口をみると、農業・漁業・林業は若い担い手が少なく、代わりに若い人は製造業、卸売・小売・飲食業、サービス業を中心に就業している。戦後の全国一区の雇用システムは産業間の年齢階層のアンバランスを生み、跡継ぎなき産業は廃れそうに見える。しかし、このシステム事態が崩れようとしている今、何歳まで働けるか、何をやるのか、個人の産業活動が評価される地域には人は集まるのではないか。



●コンセプトと経営問題

この取材の相手をしてくださったのは、東條副館長で、打ち解けた内容の話が伺えた。「ついで・ながら・街のオアシス」という言葉は、私の思った気分を表しているのだが、このことは博物館にとって極めて重要な意味をもっていると考えている。文中にも書いたが、どこの博物館も「文化を楽しむ遊ぶ」という方向について悩んでおられるように思った。ひょっとすると「ついで・ながら、などという中途半端なものではない、歴史とした博物館なのに、けしからん」と思う方もおられるかもしれない（この博物館のファンや関係者の中に）。しかしこの博物館は、その規模以上に、博物館の楽しみ方についての主張を、表現していると思った。

「もうひとつ述べたくなかったが、それは経営の問題である。ここは「原則として独立採算制です」と聞いたが、「それはどれくらいですか」と原則通りには行っていないだろうと言わんばかりに聞いてしまった。「支出が7億円で、その70%が自主的収入です」との返事に「そりゃすごいですね」と言ってしまった。あちこちの博物館で話を聞いたが、この数字は断崖である（例えば、運営費は建設費の1割ぐらいの見当だが、収入はあまり考えず、管理費の一部が出れば……といったものが多い）。この館の成立のいきさつについては今回ふれていないが、いろいろな設立前のものをひきついて来ているために、いくらか支出が増えている面もあるかもしれないが、70%は立派な数字だと思った。

今後、どこの博物館でも、もっと運営の独立採算という課題は追求されるべきであろう。

「博物館はもっと商売にすべきではないのか」というのが今回の感想である。たとえば、京都文化博物館にしても、千円出せば夏は涼しく冬は暖かいところで、気分良くコーヒー付きで、文化を楽しみながら、のんび

店に入って一杯。酒と定番ものを注文すると、はじめ左手前の箱に入った3品が出てきて（食べて少し減っている）、しばらく出てこなかった。「さすが京都やなあ、2500円というところだけか」と思っていると、カゴに入ったものを持ってきた。「京都はさすがだなあ、これだけかと思っていたよ」と言ったら、「うちはそんなきついことしやしません」といって「もう一品来ますから（上の鉢もの）」と言った。酒は燗と冷酒、合計で4500円程度（税込み）。一応リーズナブルな（納得できる）店である。

りした時間が過ごせる。これは安い買い物だと市民が思うに違いない。三条あたりで、朝の7時頃喫茶店にたむろしている人たちがいる。こういう客をもっと開拓すればいい。

高齢者のふえる世の中になっている。この人たちが気安く、文化遊びのできる場が一層求められるようになっているのである。

開館2ヶ月で26万人

今、一番もてている博物館

—滋賀県立琵琶湖博物館—

地域の文化を「楽しむ」というための要素には、やはり見て理解するという要素のほか、土地の食べ物に親しむということが重要と思われた。今回、滋賀県立琵琶湖博物館に行って改めてそのことを強く感じた。

●今一番話題になっている博物館

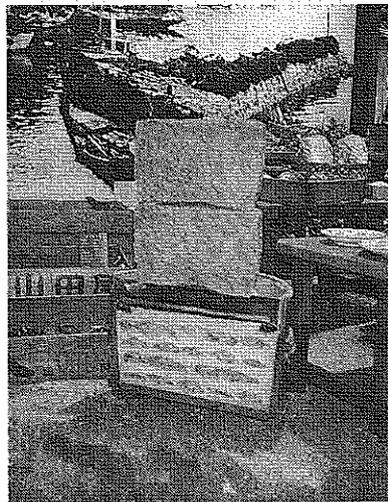
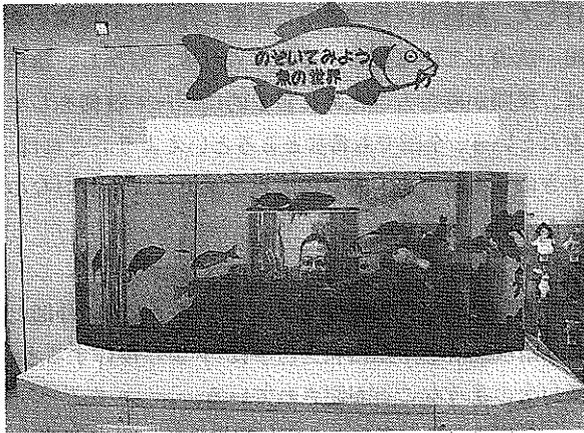
草津市内の琵琶湖のほとりにある鳥丸半島に立地している。敷地面積は4.2ha、延床面積は2.4ha施設で、研究施設・文化施設・生涯学習施設・交流情報センターの機能を兼ね備えた博物館になっている。

博物館の基本テーマは「琵琶湖」が中心にあって、琵琶湖のおいたち（自然史分野）、人と琵琶湖の歴史（歴史分野）、湖の環境と人々の暮らし（環境分野）の3つの分野の展示を行っている。

この博物館がオープンしたのは1996年10月20日で、その後2ヶ月で既に26万人（うち団体が17%）を突破する人気を博している。

●「地域参加型」を標榜する広域的な情報システム

この博物館の人気の特徴は、展示内容に地域の市民から集めた情報を多分に生かしており、これまでの博



上：魚の気持ちを味わってみました

左：塩漬けの鮎のレプリカ

博物館のワンウェイ型情報発信でなく、県立琵琶湖研究所の研究活動がベースにあって、市民から集めた地域情報を、市民→地域情報→研究→展示→市民とフィードバックさせる市民参加型のシステムになっている点にある。

もともと県立琵琶湖研究所で行っていたホタルダス(蛍の情報)、タンポポ情報などは博物館の展示に反映されている。また、教育委員会から依頼された小学校の全校調査で、子供達に親とおじいちゃん、おばあちゃんの体験などを聞き取り調査させ、3世代にわたる琵琶湖と人との関わりなどのコーナーに展示している。

こうした市民参加型のネットワークを作っておけば、そういう人が完成後に営業マンとなってくれる効果もあるものと考えられた。

●情報システムを今後いかに運用していくか

こうした市民参加型の情報システムは、館内をLANで結び、2台のUNIX機で電算と画像処理、データベース、インターネットを一括して行うことで実現している。実際に使われている施設の情報処理システムとし

ては、おそらく日本で最も進んだものの一つではないかと思われる。しかし「市民参加型博物館はとにかく大変です」と情報担当職員は語った。例えば、市民からの情報をメッシュで画像化する場合、次のような一連の作業が必要となる。

- ①全県下から情報を集めて、集まった情報からコンピュータに入力し
- ②1/25,000の地図をメッシュに切って、デジタルデータで入力し
- ③データを編集してモニター化し
- ④人に見せられるように作成して展示にこぎつける

これらの1サイクルに専属職員を2人はりつけても2~3年かかるという。そこまで時間と労力と投資をかけた情報システムでも、館内に据え付けてあるパソコンで開いてもらえないと発信ができない。また、絶えず情報のメンテナンスを行わないと情報の新鮮味も失われてしまう。今後、博物館として扱うテーマを増やしていく予定ということで大いに注目されるが、情報システムの運用がポイントのようであった。

●ホンモノそっくりの鮎ずしのレプリカに期待させられたが

この博物館に来る前に大いに期待していたことがある。鮎ずしである。食い気ばかりで大変申し訳ないが、琵琶湖の生活文化となれば湖産アユと鮎ずしは最低でも博物館のレストランで食べられると期待していた。「国立民族学博物館でも民族料理が月替わりで食べられたのだから……」。

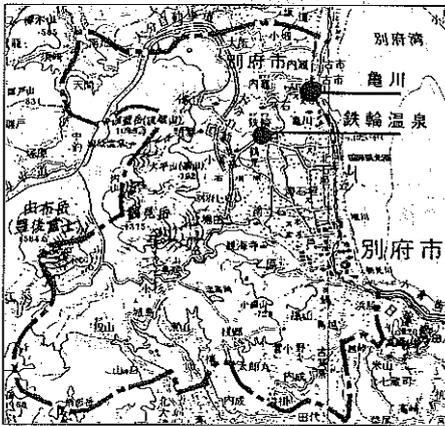
展示品ではホンモノそっくりの鮎ずしのレプリカがあって、思わず香りまでかきそうになったりして(湖産アユ、湖産海老、鯉などもホンモノそっくりだった)、その後の展開を期待したが、残念ながら食べさせるようなスペースはなかった。正確に言えば軽食喫茶のようなところはあったが……残念である。

救いはミュージアムショップで、バック詰めの鮎ずし(時価)が売られていて、おみやげは持って帰れそうであった。 (尾崎 正利)

障害者が普通に暮らす街—亀川

JR日豊本線で別府市に入って最初の駅が亀川駅であり、この駅周辺の街を“亀川”という。

亀川は“別府八湯”のひとつとして昔は賑わっていたが、今では鉄輪温泉の方が別府温泉の中心となり、駅東側の旅館街は少しうら寂しい雰囲気となっている。一方、駅西側の方は戸建て住宅やマンションが建ち、昔の駅裏が中心の街となってきている。



亀川的位置

●パチンコ店も移動式イスを設けている

仕事の関係で、私が初めて亀川を訪れたのは今から約3年前の秋頃だった。亀川には、「社会福祉法人：太陽の家」とその関連企業に約千人の障害者が働いている。関連企業が並んでいるメインの通りには、車椅子の人など、多くの障害者の人たちが目に付く。普段の街ではみられない光景であったことを、今でも思い出す。

「太陽の家」の前の通りにはちゃんとした歩道はなく、一見すると障害者などに配慮した街には程遠いようにみられたが、近くにある商店街を歩いていると何気なくスロープが設置されているのに気が付く。また、駅前のパチンコ店ではすべて移動できる椅子を設置し、車椅子の人が来ても自由にパチンコを楽しむようにできている。店長に聞くと、週末には1日20人程度の障害者の方が来ているという。

「太陽の家」が経営するスーパー「サンストア」には、太陽の家の従業員をはじめ、周辺の住民も利用しており、車椅子利用者（お客とストア従業員）にも取りやすいように棚は低くしてある。

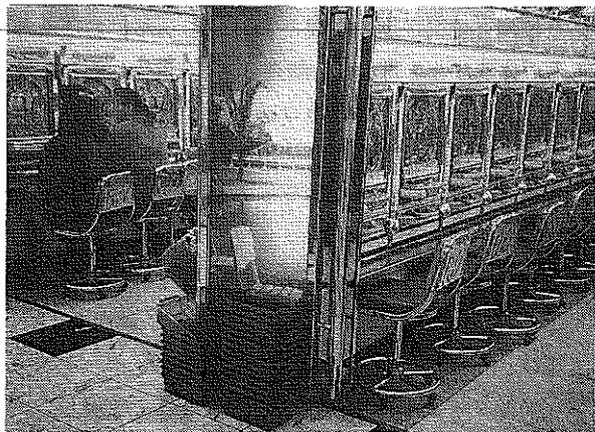
近頃、「人にやさしいまちづくり」といって公共が先

行して、高齢者や障害者等に配慮したハード整備を実施、誘導している都市が多くみられる。しかし、亀川は、民間が障害者のために自主的にハード整備をしてきたという、全国でも希なところといえよう。これは、まさに「太陽の家」設立の思想と歴史によるものなのである。

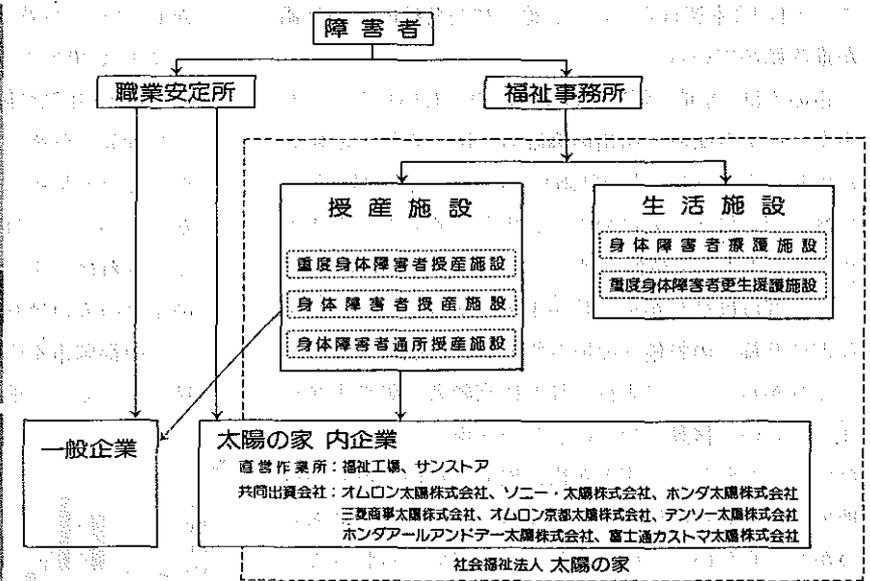
●「チャリティーより働く機会を」がモットー

「太陽の家」創立のいきさつについて「太陽の仲間たち（講談社著者：畑田和男理事長）」より抜粋すると、概ね次のようなことが記されている。

- ・この施設の創立者である中村裕先生は、昭和35年にアメリカ・ヨーロッパのリハビリテーションの実情を視察し、日本と西欧諸国との大きなギャップに愕然とし、その立ち後れに挑戦することとなる。
- ・当時、すでにストーク・マンデビル大会として車椅子の国際スポーツ大会を開催していたグッドマン博士の「手術よりスポーツ」によるリハビリテーションが多くの人々を社会復帰させているのを見て、この熱心な普及に尽力した。
- ・昭和39年の東京オリンピックの年に、第2回パラリンピックが開催され、この東京大会の開催に心血を注いだ。
- ・作家の水上勉氏の協力を依頼し、昭和40年10月に「太陽の家」を創設。保護や慈悲による日本の福祉を変えなければならないとの一心であり、『チャリティーより働く機会を』をモットーにした。社会に対しては『世に心身障害者であっても仕事の障害はありえない。太陽の家の社員は被護者ではなく労働者であり、後援者は投資家である。』と啓蒙し、仕事の提供を探す日々が続いた。



移動式椅子が置かれているパチンコ店



太陽の家の構成

左上：自主的に設置されたスナックのスロープ

左下：棒が付けられた自動販売機

- ・当初は、簡単な竹工芸や木工といった利益の少ない仕事しかなく、自立するには遠い道程だと思われた。
- ・その後、評論家の秋山ちえ子女史をさそって、オムロン(株) (当時は立石電気(株))の社長室を訪問し、立石社長のオムロン太陽の家設立の意志決定をみた。
- ・障害者の必死の頑張りにより1年目から黒字を出し、この業績をみて、その後ソニー太陽(株)、ホンダ太陽(株)、三菱商事太陽(株)、デンソー太陽(株)、オムロン京都太陽(株)、ホンダアールアンドデー太陽(株)が次々と共同出資の会社を設立することになった。
- ・太陽の家の共同出資会社の多くは、施設入所者だった重度障害者が取締役工場長となっており、経営に参画し、立派に企業人として社会的使命を果たしているのである。

このように障害者が働き、自立して生活している街であるからこそ、商店街やパチンコ店も障害者の方を無視しては商売が成り立たない街となっているのである。地元には、商店街の経営者を中心としたまちづく

りの集まりで「さんもく会」というのがある。この集まりにも「太陽の家」の代表者も参加し、まちづくりについて議論をしているようだ。

●障害者の人が働くための生活援助員

昨年、「太陽の家」でホンダ太陽(株)、オムロン太陽(株)など工場働く障害者の方を視察する機会があった。ホンダ太陽(株)ではターンシグナルキャンセルカム(車の左折、右折が終わったときに自動的にウィンカーを消す働きをする部品)を創っていた。これは通常両手作業でも指先の力を必要とされるため、健常者にとっても数をこなすのは辛い作業であるといわれる。しかし、手指機能の弱い人でも作業ができるように固定治具、専用治具の使用、あるいはライシの改善などによって障害者でも効率よく作業が進むようにしていた。このような改善については、障害者の人たちが自ら研究、開発するとのことであった。

ある部屋では手の不自由な方が足でコンピューターのキーをたたいており、用事がある時には生活援助員の方がサポートしている。

また、ここでは障害者の方が、健常者のパートの方を指導するそうで、最初は違和感があるようだが、これが当たり前になってくるとのことである。ここでは健常者と障害者という言葉の違いはあまり意味をなさないようである。

●本当のハード整備はこれから

最近では、民営の亀の井バスが亀川地区にリフトバ

スを1日12本運行するなど、徐々に公共機関での整備が進み始めている。

市の方は、平成7年度には「人にやさしいまちづくり事業」に取り組み、亀川の高齢者や障害者等に配慮したまちづくりのあり方の計画を行い、さらに平成8年度には、引き続き「人にやさしいまちづくり」の重点プロジェクトとして位置づけられる「亀川駅の基本設計」など、遅ればせながら行政が主体となって道路や駅舎など公共施設の整備への取り組みを行い始めている。

これから、ハード先行で徐々に高齢者や障害者等が住みやすい、移動しやすいきれいな街ができるかもしれない。しかし、障害者が街に出でこない、あるいは地域で生活しない街であっては何のための整備であるかわからない。やはり、基本は亀川でみられるように障害者であっても社会の一員として生活できるような雇用の場があること、あるいは障害者でも楽しく遊べるような場があることなど、ソフトを含めてのまちづくりと連携してこそハードも生きてくるものと思う。(山田 龍雄)

地域データ散歩

人口定着の最近の動き

地域の担い手である後継ぎが、20~24歳から25~29歳、あるいは25~29歳から30~34歳へ、5歳の年をとる時に、Uターンなどで地元に戻って来た後、ほぼ絶対数は安定して推移するという法則性がありそうだと、20号で紹介した。

今回は、1995年の国勢調査結果を用いて、5歳階級別人口が5年後にどう推移するかという推移率(将来人口推計の際に用いる趨勢型予測のベースとなる)によって、各世代の動きをみてみた。

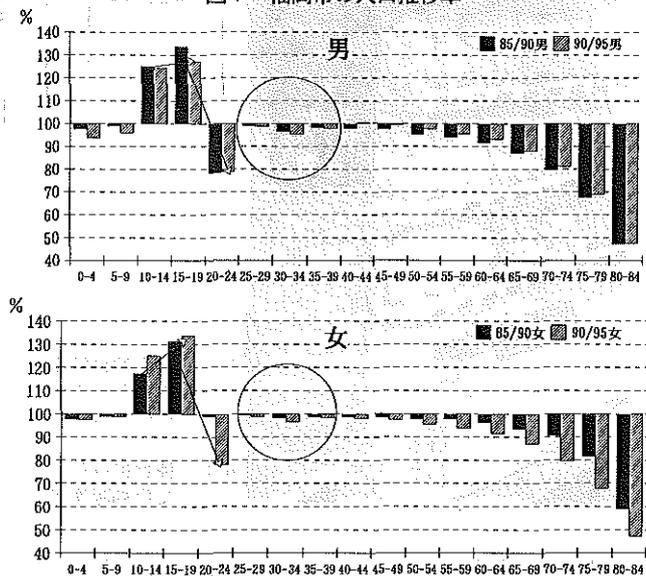
※図の見方: 100%は、85年→90年、90年→95年の間に、各年代が上位5歳階級世代も同規模だったことを示す。したがって、100%以上はその期間に流入増加、それ以下は流出減少となる

●福岡市の20歳代女子の定着率が急減
ご存じのように、福岡市は、学生を中心とする若年世帯が集中することでよく知られている。図1をみると、男女ともに10~14歳世代が15~19歳、あるいは20~24歳になるときに30%程度の増加率となる。し

かし、20~24歳が25~29歳になる時に、男子の方はマイナス20%となり、市外、県外へ流出していく傾向はこの10年間は同じであるのに対して、かつては、女子は地元で就職するなど定着する傾向がみられたものが、これも男子と同じように市外へと流出する傾向になっている。これからは男女ともにこの年代が流出するとなれば、少子化、晩婚化に拍車をかけて、福岡市の子供の人口は減少していくと予測される。

この福岡市を中心とした都市圏に隣接し、独自の圏域を持っている地域の中核都市の状況を見る。

図1 福岡市の人口推移率



●飯塚、久留米、佐賀、唐津などの中核都市

東部の飯塚市は、福岡市まで1時間圏内の位置にあり、筑豊地域の中心都市として一定の機能を有しているが、最近JR篠栗線などを利用した福岡市への通勤・通学も増加している都市である。以前も紹介したが、飯塚市には2大学・2学部が立地し、15~19歳、20~24歳の世代に移行するときに、この世代の人口は流入増加している(図2)。男子の流入に比べて、女子は流出傾向であり、わずかだがこの10年間で若干流出率は縮小している。冒頭述べたように、25~29歳が30~34歳になる時に男子の推移率が少し上昇しているが、次の世代は逆に推移率がマイナスへと逆転している。大学卒業後の受け皿がまだ十分でないことを示している。

南部の久留米市(図3)は、福岡市と30分の通勤圏内にあり、飯塚市と同様に2つの大学がある。しかし、男子の10~14歳が15~19歳になる時に流入が多いの

に対して、15～19歳から20～24歳の動きではあまり流入がみられない。それでも20～24歳が25～29歳になる間にこの10年間は流出の傾向である。一方、女子の方は、この年代の流入が多くなる傾向にあり、これ以上の女子世代も流出傾向が縮小されつつある。同様に男子も25～29歳以上の世代はここに定着する傾向が高まっている。

南西部の佐賀市(図4)は、佐賀県の県都であるが、男子は20代後半に若干の流入があるものの、それ以後は、流出している。しかし、その流出率は減ってきている。一方の女子は、15～19歳から20～24歳の期間に流入がみられるだけで、全ての年代にわたって流出

図2 飯塚市の人口推移率

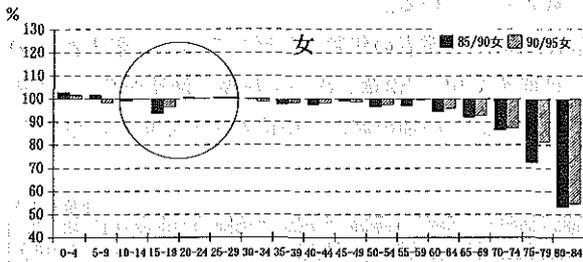
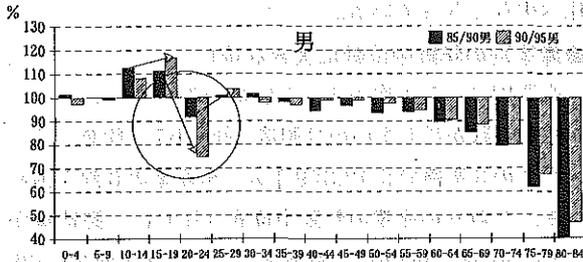
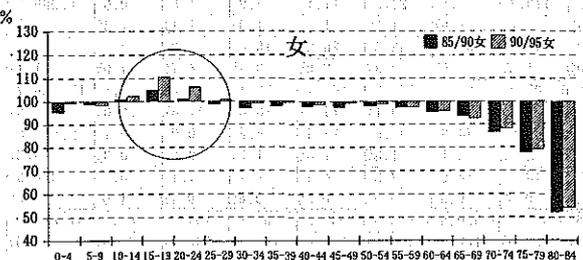
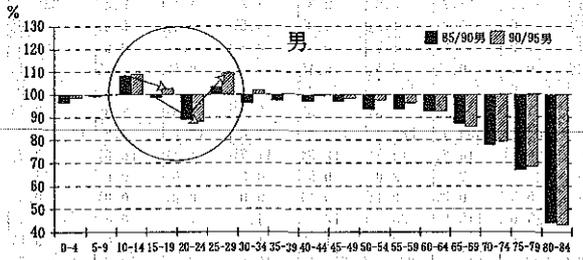


図3 久留米市の人口推移率



傾向であるが、15～29歳の若い世代の流出率は減少している。

最後に、西部の唐津市(図5)であるが、この都市には大学は無いが、男子の20～24歳が25～29歳になる時の流入は120%前後であり、福岡市とは正反対の動きを示している。女子についても、流出の幅は小さいものの同様な動きを示しているのは特徴といえる。

●福岡市の30歳代以上の男女の傾向の違い

1985～90と1990～95のそれぞれの5年間の推移率を総括すると、飯塚、久留米、唐津などの30代以上のマイナス推移率(流出あるいは死亡)は縮小傾向にあり、地元への定着性が高まっているとみれる。しかし、

図4 佐賀市の人口推移率

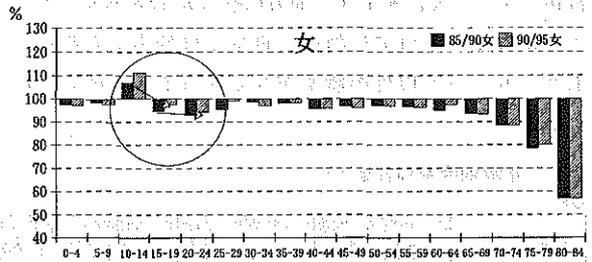
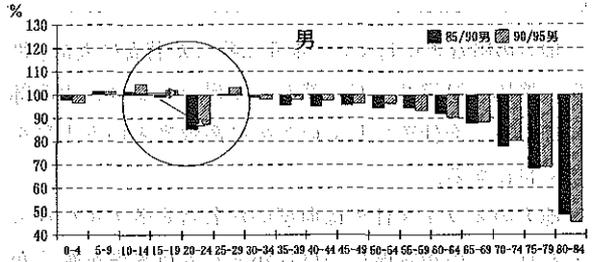
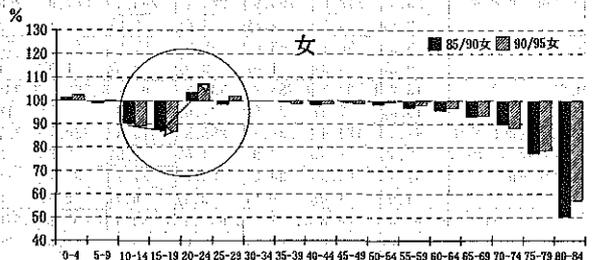
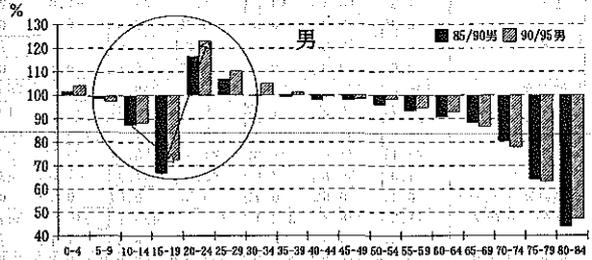


図5 唐津市の人口推移率



佐賀の場合はそれほど変わっていない。

また、福岡市は、男子がそうになっているにも関わらず、女子は逆にマイナスが大きくなっており、仮に世帯ごと市外へ流出しているとすれば男子・女子の傾向は同じになるはずであるが、女子だけの流出が大きい。一時期流行っていた中高年の離婚、別居などの影響によるものなのかどうかは定かではない。

（山辺 真一）

地域計画のための一知半解事典⑥

戦後50年の全国一区の雇用システムの結果

平成2年国勢調査産業別・年齢階層別就業者

地方の町などに行くと、地元に残った若者は大抵、役場・農協・沿道サービス業などで働いており、山間部で畑仕事、漁仕事をしているのは高齢者という光景をよく目にする。

地方のオフィス仕事は典型的な若者定着の場になっており、この指定席につけなかった人は家業を継ぐか都市に出ていく。そして、地方に残った若者もサラリーマンになる。これでは将来、日本では地方でも都市でもサラリーマン以外の職業がなくなりそうな感じではないか。

表1 年齢別産業別就業人口

総数	15~19歳	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50~54歳	55~59歳	60~64歳	65~69歳	70~74歳	75~79歳	80~84歳	85歳以上	総数
A 農業	9.8 0.6%	38.5 0.6%	77.7 1.3%	142.2 2.5%	227.7 3.3%	271.1 3.1%	262.4 3.6%	395.7 6.2%	599.5 11.1%	762.4 21.6%	576.1 29.6%	331.1 34.7%	164.2 35.0%	48.5 31.3%	11.6 26.3%	3,918.7 6.4%
B 林業	0.4 0.0%	1.7 0.0%	3.3 0.1%	3.7 0.1%	5.6 0.1%	8.2 0.1%	11.6 0.2%	20.2 0.3%	26.6 0.5%	14.9 0.4%	7.1 0.4%	2.8 0.3%	1.1 0.2%	0.3 0.2%	0.1 0.2%	107.5 0.2%
C 漁業	4.8 0.3%	13.4 0.2%	19.2 0.3%	24.7 0.4%	34.2 0.5%	41.8 0.5%	40.7 0.6%	50.5 0.8%	56.7 1.0%	41.9 1.2%	22.8 1.2%	9.9 1.0%	4.2 0.9%	1.1 0.7%	0.2 0.5%	365.1 0.6%
D 鉱業	0.5 0.0%	2.9 0.0%	4.5 0.1%	5.2 0.1%	6.9 0.1%	9.4 0.1%	9.2 0.1%	10.4 0.2%	7.9 0.1%	3.9 0.1%	1.7 0.1%	0.6 0.1%	0.2 0.0%	0.1 0.0%	0.0 0.1%	63.4 0.1%
E 建設業	146.0 8.7%	429.2 6.8%	468.3 7.6%	528.9 9.3%	740.9 10.6%	907.6 10.5%	750.0 10.2%	662.4 10.4%	624.0 11.5%	378.3 10.7%	141.5 7.3%	43.4 4.6%	16.3 3.5%	4.4 2.8%	1.0 2.3%	5,842.0 9.5%
F 製造業	456.0 27.1%	1,481.8 23.4%	1,408.5 22.8%	1,240.3 21.9%	1,647.7 23.7%	2,184.6 25.3%	2,062.9 28.0%	1,777.0 28.0%	1,307.8 24.1%	594.7 16.8%	282.7 14.5%	122.0 12.8%	54.8 11.7%	17.2 11.1%	4.8 10.8%	14,642.7 23.7%
G 電気・ガス・熱供給・水道業	7.0 0.4%	34.8 0.6%	42.6 0.7%	42.6 0.8%	44.9 0.6%	47.0 0.5%	43.0 0.6%	33.0 0.5%	28.2 0.5%	7.8 0.2%	2.0 0.1%	0.5 0.1%	0.2 0.0%	0.0 0.0%	0.0 0.0%	333.6 0.5%
H 運輸・通信業	71.9 4.3%	346.2 5.5%	372.1 6.0%	351.0 6.2%	438.1 6.3%	610.6 7.1%	544.5 7.4%	439.4 6.9%	325.0 6.0%	118.0 3.3%	38.7 2.0%	12.7 1.3%	4.7 1.0%	1.4 0.9%	0.4 1.0%	3,674.7 6.0%
I 卸売・小売業・飲食店	560.7 33.3%	1,618.9 25.6%	1,357.7 22.0%	1,244.0 22.0%	1,562.2 22.4%	2,069.8 24.0%	1,707.5 23.2%	1,330.0 21.0%	988.7 18.2%	612.6 17.4%	367.1 18.9%	208.5 21.8%	116.9 24.9%	43.7 28.2%	13.4 30.3%	13,801.7 22.4%
J 金融・保険業	35.5 2.1%	319.6 5.1%	295.9 4.8%	224.1 4.0%	249.5 3.6%	267.0 3.1%	208.6 2.8%	149.2 2.4%	119.3 2.2%	57.8 1.6%	24.3 1.3%	11.1 2.9%	4.9 1.0%	1.8 1.1%	0.6 1.4%	1,969.2 3.2%
K 不動産業	5.3 0.3%	56.2 0.9%	63.0 1.0%	48.8 0.9%	57.8 0.8%	85.2 1.0%	72.9 1.0%	64.2 1.0%	70.5 1.3%	69.6 2.0%	45.3 2.3%	26.9 2.8%	16.6 3.5%	7.3 4.7%	3.1 7.0%	692.6 1.1%
L サービス業	313.2 18.6%	1,733.3 27.4%	1,785.2 28.9%	1,530.5 27.0%	1,601.1 23.0%	1,769.1 20.5%	1,388.8 18.8%	1,205.5 19.0%	1,107.3 20.4%	781.7 22.1%	391.5 20.1%	167.1 17.5%	78.1 16.6%	27.0 17.4%	8.4 19.0%	13,886.7 22.5%
M 公務（他に分類されないもの）	41.4 2.5%	184.4 2.9%	239.4 3.9%	258.5 4.6%	315.3 4.5%	330.7 3.8%	237.4 3.2%	180.1 2.8%	145.9 2.7%	74.9 2.1%	35.5 1.8%	13.6 1.4%	4.6 1.0%	0.9 0.6%	0.1 0.3%	2,062.8 3.3%
N 分類不能	31.3 1.9%	65.8 1.0%	34.2 0.6%	23.1 0.4%	27.7 0.4%	36.7 0.4%	31.3 0.4%	24.7 0.4%	18.3 0.3%	12.0 0.3%	7.2 0.4%	4.4 0.5%	2.7 0.6%	1.1 0.7%	0.4 1.0%	320.9 0.5%
合計	1,683.6 100.0%	5,326.8 100.0%	6,171.6 100.0%	5,607.4 100.0%	6,959.5 100.0%	8,637.8 100.0%	7,370.7 100.0%	6,342.3 100.0%	5,424.9 100.0%	3,530.6 100.0%	1,943.4 100.0%	954.6 100.0%	469.4 100.0%	154.9 100.0%	44.2 100.0%	61,681.6 100.0%

資料：国勢調査

●ベビーブーム世代の就業者数が圧倒的に多い

平成2年国勢調査で、全国の就業人口を産業別・年齢階層別にみると、次のような特徴がみられた（表紙図、表1）。

①我が国の就業者の年齢構造は、人口ピラミッドと同様、ベビーブーム世代（以下BB世代とする）にあたる40~44歳、45~49歳の世代がそれぞれ8,637千人、7,370千人と最も多く、合わせると我が国の就業者数の1/4を占めている。

②その前後の世代では就業者数はBB世代ほど多くなく、50代以上の階層では、年齢が上に行くほど徐々に就業者数が少なく、30代以下の世代ではBB世代よりも少ない。特に、30~34歳の階層はその前後の階層に比べ少なくなっている。

●産業別の年齢中位数に大きな違い

産業別にみると次のような特徴がみられた。

①就業者数が最も多いのは製造、卸・小売・飲食、サービスの3業種で計42,329千人、全産業の6割を占める。これらの産業の年齢中位層（注）は、製造業が40~44歳、卸・小売・飲食業、サービス業が35~39歳となっている。

②産業別に就業者の年齢中位層をみると、最も高いのは農業で55~59歳、次いで林業、漁業が50~54歳と高い。その他の産業で中位数が多く集まるのは35

～39歳、40～44歳の階層である。

③産業別に最も就業者が多い年齢層をみると、農林漁業は50代以上の階層に集まっているのに対し、若年層はどんどん少なくなっている。これに対し、卸・小売・飲食業、金融・保険業、サービス業では20代に多く集まっており、年齢層によって産業を棲み分けているような感じである。

●過去20年間で建設業、サービス業が大幅に伸びたBB世代

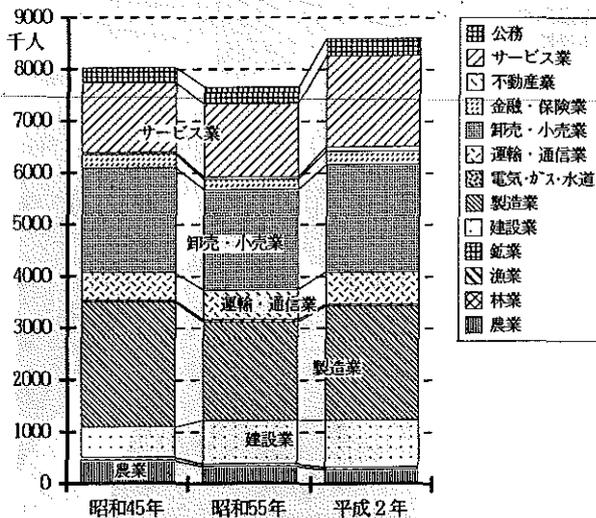
ここで、最も就業者数が多い40～44歳の階層について、20～24歳の頃（昭和45年時点）、30～34歳の頃（昭和55年時点）の推移をみることにした（図1、表2）。

総就業者数は昭和45年に802万人、昭和55年に766万人、平成2年に860万人となっており、このうち男性のみみると、433万人→523万人→513万人と推移していることから、昭和55年の総就業者の減少は、結婚に伴う女性の一時的な離職などが原因として考えられる。

産業別にみると、この増減は大きく異なっており、建設業の33万人（うち男性26万人）、サービス業の42万人（うち男性37万人）と大きな増加がみられる一方で、製造業の21万人（うち男性7万人）、農業の17万人（8万人）と、減少幅が大きかった産業もみられた。大きな増減がない産業としては公務、金融、電気・ガス・水道・熱供給業が挙げられる。

従って、40～44歳の階層のみみても、同じ時期に就業した同一世代の中でも、20年も経つと就業している産業の様相がかなり変わっており、サービス業と建設

図1 BB世代の過去20年における産業別就業人口の推移



業の就業者の大幅な増加は、過去20年の日本の産業構造を反映している。

また、その子供たちを含むとみられる平成2年時点の20～24階層では、サービス業、卸売・小売・飲食業の就業比率が多く、昨今のこれらの業界の活気がそのまま反映されたような就業状況になっている。

●担い手不足から、消えてしまう産業も？

こうした傾向から予想されるのは、一つは、ベビーブーム世代を中心とする階層の高齢化が進行し、同時に社会全体で後を支える担い手の存在が少なくなっていくこと。

もう一つは、農林漁業、鉱業など産業が高齢化し後継者がいない産業は、このままさらに廃れていくかもしれないこと。

そして、もう一つは、現在は若年層のサービス業な

表2 BB世代の過去20年における産業別就業人口の推移

(実数) 単位：千人

BB世代の年齢	昭和45年		昭和55年		平成2年	
	20～24歳	うち男性	30～34歳	うち男性	40～44歳	うち男性
A 農業	444.9	218.5	325.9	154.5	271.1	132.7
B 林業	8.6	6.8	8.5	7.1	8.2	6.7
C 漁業	49.0	39.7	45.5	36.6	41.8	31.3
D 鉱業	16.2	12.4	11.6	10.5	9.4	8.2
E 建設業	576.1	496.8	824.6	733.9	907.6	762.1
F 製造業	2,403.2	1,367.9	1,904.8	1,317.2	2,184.6	1,289.5
G 電気・ガス・熱・熱	39.2	29.7	45.6	41.4	47.0	40.8
H 運輸・通信業	528.8	407.6	571.4	520.7	610.6	528.7
I 卸売・小売業	2,025.0	945.7	1,939.3	1,188.0	2,069.8	1,023.6
J 金融・保険業	264.9	76.7	197.1	134.2	267.0	131.4
K 不動産業	30.6	14.6	49.2	35.5	85.2	53.7
L サービス業	1,341.9	490.2	1,414.9	785.4	1,768.1	861.6
M 公務	296.3	225.4	320.8	265.2	330.7	261.5
計	8,024.7	4,331.8	7,659.3	5,230.2	8,601.1	5,131.9

(増減数) 単位：%

BB世代の年齢	昭和45～55年増減		昭和55年～平成2年		昭和45年～平成2年	
	20～24歳	30～34歳	30～34歳	40～44歳	20～24歳	40～44歳
A 農業	-119.0	-64.1	-54.8	-21.8	-173.8	-85.8
B 林業	-0.1	0.4	-0.4	-0.4	-0.5	-0.1
C 漁業	-3.5	-3.2	-3.7	-5.2	-7.2	-8.4
D 鉱業	-4.6	-1.9	-2.2	-2.3	-6.8	-4.1
E 建設業	248.6	237.1	82.9	28.2	331.5	265.3
F 製造業	-498.4	-50.6	279.8	-27.7	-218.6	-78.3
G 電気・ガス・熱・熱	6.4	11.7	1.4	-0.6	7.7	11.1
H 運輸・通信業	42.7	113.0	39.2	8.0	81.8	121.0
I 卸売・小売業	-85.7	242.3	130.5	-164.4	44.7	77.9
J 金融・保険業	-67.8	57.5	70.0	-2.7	2.2	54.7
K 不動産業	18.6	20.9	36.0	18.2	54.6	39.1
L サービス業	73.0	295.3	353.3	76.1	426.2	371.4
M 公務	24.6	39.8	9.9	-3.7	34.5	36.1
計	-365.4	898.3	941.8	-98.3	576.4	800.0

資料：国勢調査
 ※1) 昭和45年は10%の抽出数による推計値である。
 ※2) 詳細不明はのぞいている

どへの就業が集中しているが、BB世代の過去20年のケースをみると、向こう20年も同じ産業で働く人は何割いるだろうかということである。

●何歳で何をやって働くか個人が考える時代に
かつて池田勇人首相の「所得倍増計画」は「ベビーブーム世代が働く年齢に達する前に日本の産業規模を大きくしておかないと、深刻な失業問題が生じる」という心配がベースにあって計画されたといわれている。これからは、何歳で何をやって働くか、個人が考えて行動しなければいけない、お金や社会保障はもとより食料さえ、だれにも頼れない時代になる。
結局は働ける能力があって、その気がある人はいつまでも人生が楽しめるが、気力も体力も衰えた人は年齢に関係なく苦しくなる、腕一本で実力優位の「職人型社会」が本格的に到来するということになるのだろう。

●個人の自立を評価してくれる地域づくりが求められる

以前、本誌でNIRA 助成研究「高齢者はなぜふるさとを離れたのか」の特集を組んだことがあったが、産業問題は中山間地域や過疎地域など特定エリアのみで解決がつくのではなく、都市も農村もベッドタウンも関係する地域バランスの問題によるものとも思えた。

最近では、九州でも「地元に残りたい」とか「近くの都市で働きたい」という若者も増えており、それが社会移動の転入超過というかたちで現れるようになった。

元をたどれば、これは個人の経済活動が可能かどうかに行き着く。社会の経済は個人の経済活動の集合体である。これからの社会は個人が若くとも歳をとっても産業活動を展開できる地域こそ、だれでも住みたくなるような地域であり、個人の自立を評価してくれる地域づくりが大事になると思われる。

それには、まず地域のもっている良さを評価して、さらに地域の人の行動を評価し、さらにいろいろな考えをもった人々を受け入れていく地域づくりが大事になると考えられた。
(尾崎 正利)

(注)年齢中位層…年齢階層の上から数えて(下からでも)ちょうど50%目にあたる人が含まれる階層

遺伝子喚起による本物のトマト

—りょくけんトマトの栽培手法—

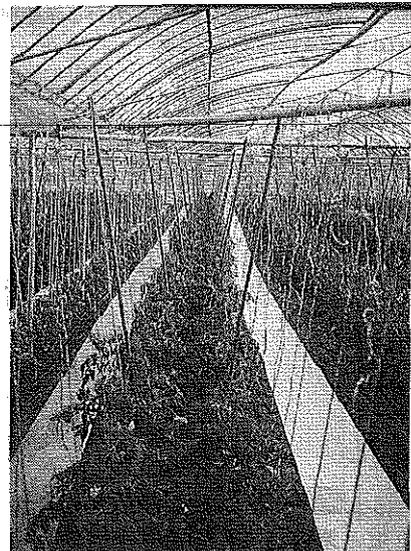
全国第二位の人口小規模都市である福岡県山田市では、石炭が残してくれたボタ山を使って、特産品開発をする試みが行われている。8年ほど前にニュースレターでこの市の特産品開発の紹介をしたが、再度挑戦しようという固い市民(行政?)の意志の復活により、この計画策定の仕事を手伝っている。その時に遭遇した「原生種の持つ遺伝子を喚起する環境づくり」によって、本物の産物づくりを進めているりょくけん農法あるいは永田農法と言われるトマト栽培を紹介したい。

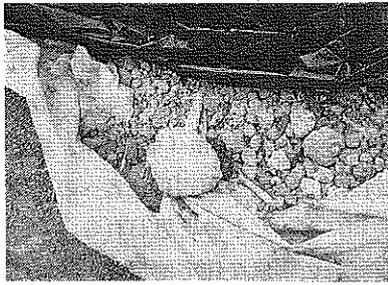
●トマトの遺伝子を喚起

りょくけん農法というのは、植物を一種の飢餓状態に追い込むことによって、原種の持っていた遺伝子を呼び起こし、本来の植物のおいしさを作り出すというもので、うまくいくかどうかは、その9割が環境によるといわれている。

どういう方法かというと、トマトの場合、原生種はアンデスの高山地域であり、荒れ果てた石ころだらけの山が誕生の地であることは、百科事典にも書いてある。その環境を人工的に作りだし、そこで育てることによって、トマト本来のうまさ、味を生み出すという方法が永田農法である。そのため、この農法を基本とするりょくけん(棚)では、まずビニールハウスで雨を避けることから始まり、風通して湿気を避け、石ころの入った培地でさらに水を避けるという、アンデスの山の

トマトの間を走る温風のビニール通路





毛細根を繁茂させる石ころ

環境を再現することによってトマトが栽培されている。

●根性のあるトマト

具体的には、岩場のカラカラに乾燥した荒地や、石ころのあるやせた赤土が栽培に最も適しているといわれ、また、高台のような風通しのよいところ（潮風に当たると糖度が増すともいわれている）、西陽が当たるようなところ、日中はよく日が照り、夜は冷え込むくらいの気温差があるところ、これらが本当のトマトの成長に適したところのようである。

ハウスは雨傘のかわりであり、与える水も普通のトマト栽培の1/100という。そのため空気も土も乾燥させる。また、与える肥料も通常の栽培の1/10だけ、除草剤などはもってのほか、絶対使用禁止である。特に除草剤は、この栽培方法で最も大事な毛細根がひとたまりもなく消えてしまうからとのことである。また、乾燥させるだけでなく、根性(?)のある毛根を育てるために、レンガや小石を敷きつめて根が下へ伸びないようにするだけでなく、地表近くの毛細根が養分を求めてびっしりと生えるような状態を作るといのである。これまでの日本の農法とは全く異なっていることは、誰もが認めている。そのため、いろんな障害も多々あったようである。

●販売につながらない農法は一輪しかないリヤカーと同じである

この言葉は、「赤いトマト(葦書房)」に記述してあるこの農法を始めた永田氏によるものであり、おいしくて、安全で、栄養分豊かな食品を求める消費者のニーズ、それに応えられるものがこの完熟トマトであり、時代がこの農法に追いついたとも語られている。

何が売れるかというだけでなく、何を消費者が求めているかを知るところからこの栽培方法は始まっているようだが、適地はあってもこれに意欲的に取り組むような農家はなかなかいないようである。自然条件だけでなく、社会条件もそろわないと新しい産地づくりは進まないという言葉からも、この農法が一般に認

知されるまでの苦勞が伺える。

そこで、実際にこの農法がどんなものか、宮崎県日向市にある宮崎緑健園を訪ね、中島社長からうかがった話を紹介したい。残念ながら、トマトは出荷時期にはまだ早かったので現物は見られなかった。

●販売の可能性から考えること

この農法では、生産のための最低規模というのは現地の条件次第であるが、人の能力と同時に、どれだけ処分できるか、つまり販売できるかがポイントであるということをまず強調された。今のトマトは、東京・大阪に大半を出荷しているそうであるが、良いもの、すなわち高く売れるものは足りない、もっと欲しいという状況のようである。しかし、一時期にしかないトマトだけでなく、年間を通じた作物販売の戦略が必要であり、ここ宮崎では、トマトだけでなく、メロンなど12品目の生産が行なわれている。

中島氏が特に強調されたのは、「いままでの農業者は、自分が良いと思ったものをつくれれば、売れると思っていたようだが、これからは何を作ったら売れるかという視点が必要である。」ということである。その理由として、外国産の輸入増加、そのために起こる販売価格の低迷、生産原価割れに対して、消費者が何を望んでいるか、望まれるものを作れば、高いお金を出してでも買ってくれる。そういうものを作らなければいけない、確実にお金のとれる農業が必要ということである。そのためには、「消費者が何を求めているか」を知るために、消費者に近づいていくしかないと言われた。

●育苗の段階がポイント

一般に出ている普通のトマトの苗を使っても、この農法ではすぐに枯れてしまうらしく、育苗段階にいかにいじめるかが大切なようである。それでも、苗の単価が普通の2倍ぐらいになっても、最終的なコストとしてはそれほど影響は無いそうで、むしろ、人件費がかなりの部分を占めるので、コスト削減のためのある程度の機械化が必要なようである。

●買いに来る人たちへ売るのがない

興味を引いたのは、ブランドの維持のため、一物二価はせずに、中央に出荷するものと同じものを地元で安くということはしていないということである。そのため、流通販路も西友などに一本化されているが、わざわざ買いに来る人たちへの対応をどうするかという悩みはあるようである。現在、この農法による青果物

は、緑建のシステムで行われている場合には、全て大都市圏方面へ出荷されるため、地元ではほとんど手に入らない。

●農業が夢を与える産業になること

これまでの農法とは全く違うこの農法を行うためには、今の農業を経験していない人、農業の経験がない人の方がよいかもしれないという言葉は、今の既存の産業技術のブレークスルーを期待する社会と相通じるものがあるような気がしてならない。しかし、いずれにしても農業というものに対して、若い人が夢を持てるものにならないければ、いくら後継者確保を叫んでも育たないという言葉は、農業経験の無かった中島社長ならではの言葉であろうと思った。

宇美町で初めての炭住改良住宅が完成

—原田地区・第2地区改良住宅—

よかネット17号(1995年9月)に掲載した原田地区に引き続いて、昨年の12月末に原田第2地区が竣工した。これで、来年度の事業である入り口部分の道路とポケットパーク整備を除いて、当地区の事業はほぼ完成したことになる。当地区は密集住宅市街地整備促進事業(旧小規模炭住改良事業)によって、地区を2つに分けて事業を行ったところであり、調査・計画から始まり、合意形成づくり、買収・除却、建設まで足かけ約4年かかったことになる。人が住んでいるところの更新は、時間を要するものだと改めて感じた次第である。

●メイン道路の完成によって高級住宅地へ変身

従前との違いでみると、当然建物が2~3階建て

になり、新しくハイカラなったわけであるが、地区のイメージを大きく変えているのが、幅員で整備されたメインの道路である。従前は3~4mと狭くて、暗いイメージであったところを、幅員8m(車道6m、歩道2m)の道路とした効果は大きく、周辺居住者への利便性の向上とともに便利になったものと思われる。

地元の人によると「昔の劣悪な住宅地から一挙に高級住宅地になったようですね」と言っているようである。また、昨年には分譲マンションが建っているのと勘違いして見に来た人がいるとも聞く。

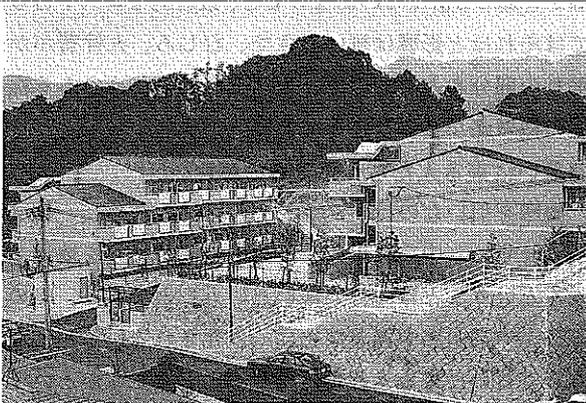
●狭い敷地に段差を利用して2棟の住棟を配置

道路を広く確保した分、原田第2地区の敷地条件は厳しいものがあつたが、狭いながらも2棟、28戸分の建物の完成をみている。その建物の特徴としては次のような事があげられるが、もう少し時間がたてば入居者の方に住み心地について聞きに行きたいと思っている。

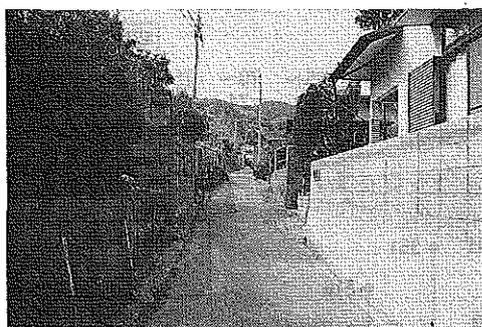
宅地高さを道路勾配に併せて4つの宅盤とし、各宅地から宅地へはスロープで行けるようにしている。景観や隣地への圧迫感を緩和するため、道路側は2階建てとしている。1階部分に高齢者や身体の弱い方ができるだけ入居していただけるよう、1階住戸へはすべてスロープでアプローチできるようにしている。

主な事業概要と事業の経緯

<p>○事業の概要)</p> <p>○地区の従前戸数</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原田地区：48戸 ・原田第2地区：41戸 計89戸 <p>○計画戸数</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原田地区：33戸(内4戸は原田第2地区) ・原田第2地区：32戸(内4戸は原田地区) 計65戸 <p>○階数：3階、一部2階建て</p> <p>○事業面積</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原田地区：約1.1ha ・原田第2地区：約0.5ha <p>○(主な事業の経緯)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○平成4年2月~6月：基礎調査、基本計画策定 ○同年7月~11月：事業認可申請、補助金申請等 ○同年12月~平成5年3月：原田地区建物実施設計 ○平成5年5月~10月：補助金申請、事業認可変更申請、開発申請 ○平成5年12月~平成7年3月：原田地区造成建築工事 ○平成7年6月~7月：造成関連補助金申請 ○平成7年9月~平成8年3月：第2地区除却、造成 ○平成8年4月~平成12月：第2地区建築工事



原田第2地区の住棟



従前の
道路状況



現在の
道路状況

周辺の住宅地との調和を配慮し、原田地区と同様に屋根は瓦葺き。

住戸と住戸の間には吹き抜け空間を設け、トイレや洗面所、浴室へ採光が得られるようにしている。

（山田 龍雄）

所員近況

グラウンド・ワーク・トラスト通信

福岡県グラウンドワークトラスト研究会設立準備会は、前号までにも紹介したように、花の苗を配ったり、講演会を開いたり、発祥の地イギリスに視察に行ったりと徐々に活動をしています。

昨年暮れ12月20日には、これまでのアクションに一区切りつける形で、アクロス福岡の円形ホールで「花の輪、人の和、地域の〇」と題し、いろんな人に話してもらう「リレートーク&コンサート」を行いました。グラウンドワークトラストの目的のひとつである環境教育ともからめ、「教育」をキーワードとした内容となりました。

まず最初に『花の命・土の命』として地球環境財団推進委員の藤本倫子さんにEM菌についての話をいただきました。藤本さんは個人で福岡市内に実験場を作り、生ゴミをEM菌で肥料に変える実験などをして成果を上げています。福岡市にゴミ問題についてEM菌の

導入を提案に行ったところ、市からは「ゴミは集めて燃やせばいいんだ」と言われたそうです。

進学塾「啓明館」の青木博氏からは『子供達の成長に必要な知識とは？知恵とは？』として、塾の先生という学校の教師よりも自由な立場から、子供を取り巻く環境などについての話がありました。先生も昔と変わらずがんばっているが地域の教育力が落ちていること、親からの相談でも単に親がすっきりすればすむ問題の方が多く、いろんな人が地域社会を離れて会社などのそれぞれの社会に入ってしまったことが弊害になっているのではないかという話などが印象的でした。

そのほか、『水と緑とまちづくりのおはなし』として博多の海に美しい松原を取り戻そうという活動をしている「はかた夢松原の会」代表の川口道子さんから会の活動について、福岡県建築士会女性委員会「花ば咲かせ隊」の成田聖子さんから『花の輪、人の和、地域の〇』についてのおはなし、「科学公園をつくらん会」で九州大学名誉教授の河合光路氏から『科学を楽しもう』と題したおはなしなどがありました。途中で、イギリス・マーサー&カソン・グラウンドワークトラストの視察報告、詩の朗読などをはさみながら、最後は岩切みきよしコンサートで締めくくりました。

隠岐（西ノ島町）の実態

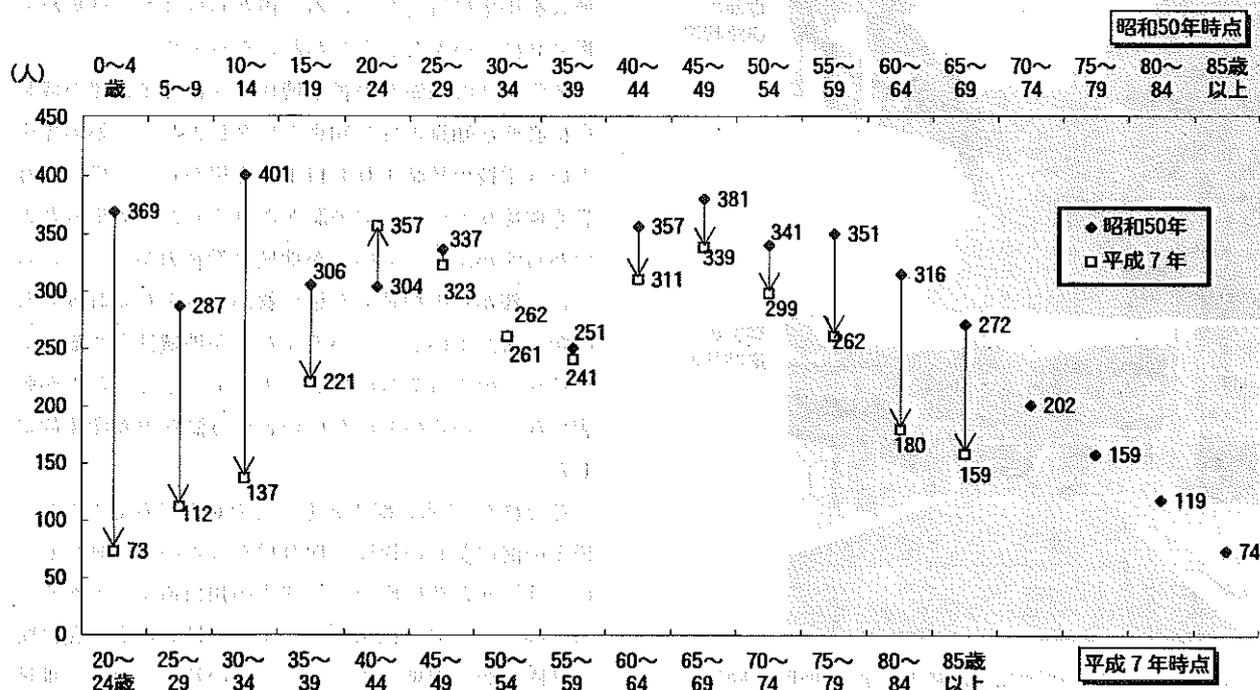
「今年の浦郷小学校の新入生は5人だって」、これは私が正月休みを利用し帰省した際、友人から聞いた話です。

私の故郷である隠岐は、島根県沖に浮かぶ、4つの島（島前（ドウゼン、3島）、島後（ドウゴ、1島））からなっています。私が生まれたのは、島前の西ノ島町（人口約4,000人）という漁業と観光の島です。

3年程前、NHK大河ドラマの「太平記」の舞台となり、田中美佐子の出身地としても有名(?)な田舎です。（西ノ島町の学校）

現在の島内の学校は、小学校が3校（浦郷、黒木、三田）、中学校が1校（西ノ島中学校）であり、高校は、隣の島へ毎日船で通うという次第です。

私が学校に通っていた頃は、小学校は1学年1クラス（37~40人）、中学校は小学校から集まってくるので、1学年2クラス（1学年約75人）と、幼稚園・保育所（3歳位）から中学を卒業するまでの約12年間は、全く代



西ノ島町の20年間の人口推移

わりばえのしないメンバーが40人位はいるという状況でした。丁度、私の学年は、第2次ベビーブーム世代に入ったか入らないか、という時期ですので、1学年の人数が多かった時期だと思います。

そこで話は最初に戻りますが、新入生が5人と聞いて、私の小学生の頃とはあまりにも違いすぎるので、驚いたのです。

〈人口データにみる20年間の変化〉

昭和50年と平成7年の国勢調査の年齢階層別人口から人口の推移をみると(上図)、昭和50年時点で0~4歳の人口の減少が顕著になっています。多くが、高校を卒業と同時に、関西方面へ就職で出ていくためです。

しかし、20~24歳(昭和50年時点)においては、304人から357人へと、53人の増加がみられます。増加の要因としては、Uターンのほかに以下のようなことが考えられます。

○島(町)外からパートナーを引っ張ってきた。

○次のような島(町)の施策による。

- ・「シルバーアルカディア」プロジェクトによる島外、県外からの高齢者の受け入れ。
- ・就職情報誌や新聞での「漁師募集」の呼びかけによる県外からの脱サラ受け入れ。

〈私的データによる20年間の変化〉

次に人口の変化の内容について、私の同級生の流れを、覚えている範囲で追うと、以下のようになります。

- (小学校) 浦郷小学校(1学年37~40人)
- ↓
- (中学校) 西ノ島中学校(1学年約75人、2クラス)
- ↓
- (高校) ①地元の島前高校: 約60人
 ↓
 就職: 島(町)内(1)、関東(2)、中部(2)、関西(約35)、広島(1)、松江市(1)
 専門学校: 関西(約10人)、松江市(2)
 大学: 九州(1)、短期大学: 関西(3)
 看護学校: 関西(1)
- ②隠岐郡内の他の高校: 5人
 大学: 関西(1)、松江市(1)
 看護学校: 関西(1)、米子市(1)
- ③松江市内の高校: 10人
 大学: 関東(1)、中部(2)、九州(3)
 専門学校: 関東(1)
 就職: 関西(1) 不明: (3)
- ④就職: 島(町)外の隠岐(1人)
 出雲市(1人)
- (現在) 西ノ島町内: 8人、中部: 4人、松江市内: 5人、関西: 約50人、出雲市内: 2人、九州: 2人、関東: 6人

山陰地方の中でも隠岐の島は、特に関西への流出が多く、私の同級生においても関西に約50人がおり、その内、島根県外の男性と結婚している、Uターンの可能性が全く無いのが、約15人います。

昭和60年から平成7年の高齢化率は16.2%から30.6

「%、我が故郷の将来が心配ですが、私に「帰る気はあるの?」と問われたら……です。(澤谷 真紀子)

佐賀都市問題研究会の発会と開催

佐賀でいろいろお仕事をお手伝いしている中で、これからの佐賀はどういう発展をし、どのような都市間競争を行うのか、あるいは今の内在的なポテンシャルはどのくらいなのか、ということ在地元の人はどう思っているのだろうかと思ひ、このような地域の基本的な問題について、話し合う場が要るのではないのか、ということ、荒牧先生(佐賀大学理工学部)に御相談して、佐賀都市問題研究会を発足しようということになりました。

会の呼びかけ人は、荒牧先生、伊藤榮彦佐賀大学名誉教授、宮崎善吾(財)佐賀経済調査協会理事長です。

去る2月5日夕方6時半から、佐賀市役所で第1回例会を開催し、46名の産学官市民の方が参加なさいました。問題提起は糸乗が「儲かるまちと儲からないまち」というテーマで行い、その後、活発な意見交換がなされました。

今後、2~3ヶ月のペースで行う予定です。次回の日程は未定ですが、佐賀市の方に限らず、幅広く参加者を募っています。参加してみようという方は下記までご連絡を。

弊社「佐賀都市問題研究会」連絡係 (尾崎)

竜馬の泊まった「寺田屋」という宿が、今も営業中ということを知っていますか?

トランスパーソナルの会で伏見に行った。この片仮名の名前は好きではないのだが、気分のよいグループではある。その会で「月桂冠大倉記念館」へ行き、うまい酒の利き酒をしたあとで、気に入った酒を求め、食事を寺田屋の隣で食べたあと寺田屋を見学した。この間は5分ぐらいの散歩道である。

京都市役所には、今でもあるのかどうか知らないが、海がないのに「河港課」という課が以前にはあった。その港という意味がこの伏見港である。この伏見港の寺田屋は往時の京阪特急の発着場で、その模様は落語の「三十石舟」に活写されている。

寺田屋は当時からの舟宿であり、「今も維新当時のままで営業し、娘おりょうさんととの恋の宿として知られています。寺田屋に於ける竜馬先生は剣あり恋あり又、薩長連繫と言う男の仕事あり」であったと、寺田屋の案内に書かれている。

私は20年前ぐらいから、「三十石舟」の復活という試みに参加していて、「そのときおりょうさんがハダカで駆け上がったのがこの階段で、前ぐらいかくしたかもしれませんなあ……」といった名調子の、当主の解説を何度か聞いた。もちろん、柱には刃傷やピストルの弾痕も残っている。

先日宮崎県に行ったら、「坂本龍馬が新婚旅行で泊まったのがこの温泉宿……」と説明し、自慢していたので、つい「寺田屋がそのまま残っていて、今も泊まれますよ」と言ったら「えっ」ということだったので、紹介することにした。なお、宿泊料は、一泊7,000円(朝食付)、連絡先は075-622-0243。

竜馬ファンの方、どうぞ御利用ください。その節には「感想」を当編集部へお寄せください。

(糸乗 貞喜)

京都観光情報

坂本龍馬と薩長烈士の
今も泊れる維新の旅籠

伏見 史跡 坂本龍馬の寺田屋

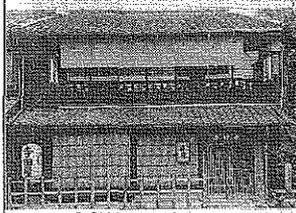
〒612 京都市伏見区南浜町
電話 (075) 622-0243

宿泊の案内

○宿泊料(朝食付) 電話 (075) 622-0243
(PM5:00-PM8:00)

1. 標準的……先ずはお電話にてお問合せ下さい。
一ヶ月前から受付致します。
尚、日曜日・休日・当社の
受付は出来ません。

2. 脚指付料(一泊、朝食付)……………7,000円
兼泊り……………6,500円
チェックイン……………PM5:00-PM8:00(内限)
チェックアウト……………AM9:00



交通の案内

○JR京都駅は八条口、京阪ホテル前から
バス(4分) 京橋下車

○近鉄は、伏見駅後徒歩下車

○京阪電鉄は、中書島駅下車100m



坂本龍馬先生肖像画(床の間の飾り)



「システム自炊法」

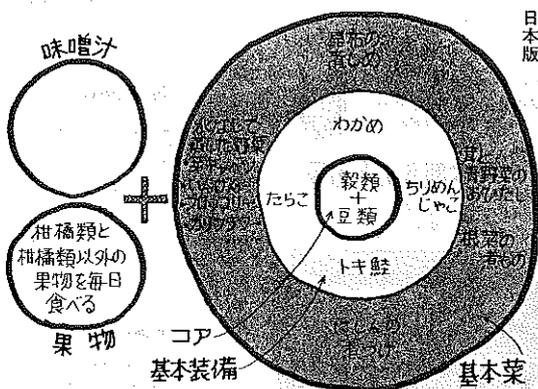
丸元 淑生 著

中公文庫

この「システム自炊法」を読んだのをきっかけに、すっかり健康食にはまってしまった。この本には、どのような料理をつくったら単身赴任者が健康な食生活を維持することができるかを具体的に述べてある。

著者が提案している食の基本システムを下図に示す。

単身赴任者の食の基本システム (システム自炊法P112より)



ご覧のように、トキ鮭以外はどれも身近にあり、しかも簡単に調理できる。わたしは週末、たらこちりめんじゃこを買うのが習慣になっており、煮豆もよく料理する。

ところで、健康食にこだわりながら思うのだが、健康にいい食べ物といわれているものは、なぜか子供の頃嫌いだった食べ物が多い。でも不思議なことに歳とともにおいしく感じるようになる。ひじきの煮付けなんかは子供の頃嫌いだったが、今は時々、無性に食べたくなる。また、こういう時に食べると、体にすんなり行き渡って体からおいしいと思える。きっと体が栄養で満たされていっているのだろう。

上図の食の基本システムにある食品も、こんな感覚を与えてくれる。いかに今までこれらの栄養が不足していたかと思う程である。

最近体の調子の悪い方、最近食べ物をおいしいと思えない方、体からおいしいという感覚を味わいたい方

どうぞ上図の食の基本システムをお試し下さい。

(七瀬 かおり)

編集後記

■某役所に行ったときのことで、皆ががやがやと騒いでいました。だれかなぐり込みでもきたのかな、それとも倒れたのかなと思ながら、耳を澄まして聞いてみると、どうもそのフロアにあるコンピューターのサーバー（パソコンネットワークのキーマンとも言えるもの）がダウンしたようでした。今までのデータが無くなったとか、どうやって復旧しようかという話だったようです

■うちの事務所でも各自のパソコンをネットワークして、サーバーを使いながら、せせせとレポートづくりを行っていますが、年度末のこの時期にダウンしたらと思うとぞっとすることがあります。平日頃ではなくても定期的にはバックアップをしておく大切さをつくづく感じた次第です。

■こういうネットワークシステムになると、各人が分担して作成した成果を一気に合体させることが一瞬にしてできるのですが、一瞬にして全てが無と化すこともあり得ることで。いろいろなバックアップシステムもあるようですが、そのまたバックアップは要らないかという不安をなくせるシステムは一体いつになったらできるのでしょうか。(ベ)

■前号3頁の「全国区の博物館、九州の博物館の利用者推移」の表中に誤植がありました。修正分の表を同封しておりますので、差し替えの程お願いいたします。(ウ)

よかネット NO.26 1997. 3

(編集・発行)

(株)九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132
大阪事務所	TEL 06-942-5732
名古屋事務所	TEL 052-962-1224
東京事務所	TEL 03-3226-9130